

# 常照

第 824 号

## 若坊守の往生に想う

今年の四月二十四日、満三十八歳を一期として若坊守が往生いたしました。

二年前に癌を患い、亡くなる一年前は、大変美しく、輝いて人生を楽しんでおりました。年前から少しずつ痛みが始め、年が明けて坂道を転げ落ちるかのようになり、痛みが増していききました。なんとか回復を願いながらも、覚悟していたやささきの往生でした。

まだ小学校二年生の我が子を置いて、旅立つ悔しさは、さぞかし大きかったのではないかと思えます。嫁入りしてわずか八年のご縁でした。

葬儀が終わり出棺して、火葬場へ向かうバスの車窓から、あちらこちらに咲く桜の花を眺め、例年よりも早い開花を楽しみました。様々な想いを巡らせながら、ふと頭に浮かんだのが、良寛さんの辞世の句でした。

「散る桜 残る桜も 散る桜」

残された自分も、いつか必ず散っていく運命（さだめ）だなあ、と思いつつながら外の風景を、ぼんやりと眺めながら向かいました。きれいに咲いた花は、いつまで

も美しく咲いてはいられない。必ず散らねばならない。美しさを樂しむ一方、花の枯れていく哀愁までも比喻として、人の儂さや無常観を表現しています。

親鸞聖人の幼少期にこんな和歌を詠まれたと伝えられています。

「明日ありと

おもう心のあだ桜夜半（よわ）に嵐の吹かぬものかは」

（今咲いている桜を、明日も見る事ができると安心していると、夜半に強嵐が来て散ってしまうかもしれない）

いつ散っていくとも知れない桜の儂さに、自分の命の儂さを重ね合わせている和歌であります。ついつい明日があるからと思っ

て先延ばししがちな私自身に「いつやるの？ 今でしょっ」と諸行無常の理（ことわり）を教えてくださいます。

花の美しさ儂さは、限りがあるからこそ美しい。人間の人生も限りがあるからこそ美しい。

私たちは人間の持つ寿命をはるかに超えるもの、人智を超えるものに、神聖な何かを感じます。

風雨や過酷な環境にありながら、樹齢が千年二千年を超えて、生き続ける木に対して、ご神木として敬い崇（あが）めます。

それに比べると人間は、地球の歴史の一瞬を生きていて、なんとちっぽけで、一瞬で消えていく命に、人生の美しさを想い、ご神木に対して、素直に手が合あわせられ、合掌していることに気づかさ

れます。

阿弥陀様は、この私をお浄土に撰（おさ）めとって決して捨てないお誓いを、何万年という単位では推し量ることの出来ない遠い昔から、今日の私に、はたらきかけ届けてくださいます。さらに未来永劫にわたって、願いをかけ続けてくださいます。その大いなる願いと、お慈悲のおはたらきに気づかされた時、合掌をして「ありがとうございます」と、お喜びとお念仏が素直な気持ちで、あふれ出てきます。

小二の孫が、収骨の時に、「ママ死んでどこ行ったの？」と真顔で訊いてきました。

もし皆さんが同じ立場なら（子供は真剣です）、どういう受け答えをしますか？

「天国だよ」という人もいます。神の国に行ったという人もいます。「お浄土に行ったよ」と孫に言いました。お念仏のみ教えをいたたく私たちが、自分自身の確かな往く場所「浄土」を信じ、伝えることができるのは、私たち浄土真宗門徒の誇りであります。

孫は「またママに会えるの？」って訊きました。「またお浄土で会えるよ」と言ったら安心したようにうなずいていました。

往生してから二か月が経ちました。四十九日も終わり、少し気持ちも落ち着き、想うことは、あたりまえだった日常は、今から考えると、すごく大切な時間を過ごしていたのだということに気付かされました。

あたりまえの生活ができること

への感謝とありがたさをいただけました。

み教えをいただく私たちができ  
ることは、「お浄土」にまつすぐ  
に向きあい、悲しみ苦しみをこえ、  
右往左往して、もたつきながらも  
後ろを振り返らず、前を向いてお  
念仏を称え歩ませていただくこと  
が、亡き方々に対する本当の意味  
のご供養であると信じております。

若坊守の往生にあたり、私のつ  
たない想いを、書かせていただき  
ました。

故人へのご厚情、誠にありがと  
うございました。ここに紙面をお  
借りし御礼申しあげます。

合掌

九月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 九月七日(水)～十一日(日)

熊本教区 玉関組 正元寺

講師 寺添和南師

○後期 九月十三日(火)～十六日(金)

山陰教区 鹿足組 妙壽寺

講師 村上元師

○秋季彼岸会布教

九月二十一日(水)～二十三日(金)

北海道教区 胆振組 皇恩寺

講師 増山顕佑師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使のご法話を頂きます。どうぞお誘い合わせ頂き、ご聴聞に来院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

九月二十三日(金)は秋季彼岸会に御中日にあたり、まずので月忌参詣はお休みさせて頂きます。どうぞお寺にお参りください。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (011) 471-1134  
FAX (011) 471-1134  
テレホン法話 (011) 471-1134